

中世の女流仮名文にみられる和漢対立副詞の使用状況について

吉 田 光 浩

I はじめに

中世の女流仮名文学は、前代に隆盛をきわめた和文日記および物語の影響を大きく受けていることが知られており、その用語についても、中古和文のそれを基軸として、そのなかに中世的要素が織り込まれたものとなっている。したがって、そこには、和文における広い意味での古代なるものと近代なるものとのせめぎあい、端境期にあたる中世のことばの様相の縮図を窺うことができる。

ここでは、そのような時代の推移の要諦の時期に成立をみた和文体資料『弁内侍日記』『十六夜日記』『中務内侍日記』¹⁾とはずがたり『竹むぎが記』²⁾について、当時広く使用されつつあった漢文訓読語がどのように用いられていたのか、その使用状況のあらましについて考察しておきたい。

II 和漢対立形式をもつ副詞について

我々が日常の言語生活において使用している語のなかには、「まだ」と「いまだ」、「すべて」と「ことごとく」のように、ほぼ等しい表現内容を有する複数の語が観察されることがある。これらのうちの幾つ

かは、かつて一方が和文脈で使用されていた語であり、他方が漢文訓読の場で使用されていたものである場合が少なくない。とりわけ、中古の頃には、こうした和文語と漢文訓読語の対立が顕著に見受けられるようである。このことについては、既に築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』³⁾において詳しく述べられているところである。

このような平安期にみられる仮名文特有語と漢文訓読特有語の相違、すなわち資料の文体差による用語の対立は、中世に至り、和漢混淆文が広く行われるようになって変化を遂げ、一資料中に広く両形が混在するようになっていった。この間の経緯については、峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(第二章「記録語と和漢混淆文」)および佐藤武義『今昔物語集の語彙と語法』(第四章「今昔物語集の文体からみた語彙」)に、それぞれ説話文学を対象とした詳論がみられる。

しかしながら翻って、中世の和文資料ではこのような和漢対立語はどのように用いられていたのであろうか。同一表現対象については複数の表現形式があるということは、いずれを選択するかは主体の表現意識に関わる問題であると考えられる。多くの場合は、依然、和文語を基本として使用し続けたということは想像に難くないが、すでに中古和文の文章において、和漢対立がみられるもののなかにも、漢文訓読語の使用の痕跡は認められるのである。

本稿は、中世和文資料『弁内侍日記』『十六夜日記』『中務内侍日

記』とはずがたり』『竹むきが記』を中心に、そこに用いられた和漢対立形式をもつ副詞の使用状況について若干の考察を試みるものである。副詞は、和漢対立の様相が、前代の中古において顕著にみられ、また、記述内容による影響を受け難いものが多い。したがって、その使用状況を調査することは和文への訓読語の定着状況と書き手の用語意識を知るための、ひとつの手掛かりとなると考えられる。

具体的には、峰岸明氏が上記の著書において説話文学を対象に和文調・漢文訓読調を形成する重要な要素となるものとして取り上げられた語形対立のあるものうち、副詞二十二組について考察する。

呼応副詞△いかでーネガハクハ（上が和文語、下が訓読語、以下同様）△いかでかーアニ△つゆーカッテ△などーナンゾ△
△ましてーイハムヤ△まだーイマダ△

程度副詞△いたくースコブル△いとーハナハダ△いとど・いよいよーマスマス△△いみじうーキハメテ△△おほかたーホボ△
情態副詞△かたみにータガヒニ△△かねてーアラカジメ△△しほしーシバラク△△すべてーコトゴトク△△たはやすくータヤスク△△とくースミヤカニ△△はやうースデニ△△みだりがはしくーミダリニ△△もるともにートモニ△△やうやうーヤウヤク△△やがてースナハチ△

これらの対立語は、平安期の文献を中心に論を立てられた築島氏と中世説話文学を対象に論を立てられた峰岸氏との間での若干の相違が認められるが、ここでは、今回考察を試みる作品群とほぼ同時代の資料をもとに考えられた峰岸氏の語形対立を中心に調査することにした。もちろん、和漢両形の対立関係は必ずしも一対一対応ではなく、それ以外の語あるいは表現との対立関係も考えられるかもしれない。また、厳密には文体上の問題以外に語義の上での若干の相違がみられるものも含まれているようであるが、大筋においては上記の対立関係は認められてよいものと判断し得る。

Ⅲ 中世女流仮名文における和漢対立副詞の使用状況について

本節では、西暦一三〇〇年前後に成立をみた女流の和文資料『弁内侍日記』『十六夜日記』『中務内侍日記』とはずがたり『竹むきが記』をとりあげることとする。また、比較の対象として男性の手になるものでありながら、やはり中古女流作品の影響を窺うことができるこの期の資料、『徒然草』についても調査する。使用するテキストおよび本文中の用例引用に参考としたテキストは以下の通りである。

時枝誠記編『徒然草総索引』（至文堂）
今関敏子編『校注弁内侍日記』（和泉書院）

江口正弘編『十六夜日記校本及び総索引』（笠間書院）
小久保崇明編『水府明德会彰考館本中務内侍日記―本文編―』（新典社）

辻村敏樹編『とはずがたり総索引（本文編）』『同（自立語索引編）』（笠間書院）

次田香澄・渡辺静子校注『竹むきが記』（笠間書院）
佐竹昭広・木下正俊・小島憲之『万葉集―本文編―』（塙書房）
東節夫・塚原鉄雄・前田欽吾『和泉式部日記総索引』（武蔵野書院）
阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注『日本古典文学全集源氏物語』（小学館）

なお、用例の表記については、読解の便を考慮し、適宜改めたところがある。

表―1は、和漢対立副詞の使用状況を対照できるように、呼応副詞・程度副詞・情態副詞の別にまとめたものである（数値は使用度数）。それぞれの平仮名表記が和文、カタカナ表記が漢文訓読語となっている。資料の言語量に差がみられるため使用度数を単純には比較できないが、おおむねの傾向を知ることが可能であろう。（表―1・

1、1・2、1・3参照)

これらの表から、まず、指摘し得ることは、全体的に『徒然草』は和漢両形の副詞を使用する傾向がみられるが、それに対して『十六夜日記』以下の女流仮名文においては、和文語副詞を主に用いる傾向が強いことである。『徒然草』では、ここで取り挙げた和漢対立のみられるもののうち、漢文訓読語側のみを使用しているものが四語(イマダ・タガヒニ・タヤスク・ミダリニ)、和漢両形をいずれも使用しているものが十組(などーナンゾ・ましてーイハムヤ・いとーハナハダ・いみじく(う)ーキハメテ・しばしーシバラク・とくースマヤカニ・はやく(う)ースデニ・もろともにートモニ・やうやうーヤウヤク・やがてースナハチ)、各々みられる。一方、ここで扱った中世の女流仮名資料においては、ほとんどが和文語側の語を使用しているようである。したがって、副詞については大きな傾向として、男性の手になる『徒然草』では、漢文訓読語の使用が認められる一方で、この期の女流仮名文が中古の女流仮名文の用語から大きく逸脱することなく保守的な傾向を有していたことは注意されてよい。とりわけ、そのような傾向が強く見受けられるのは『弁内侍日記』『十六夜日記』である。そこで訓読語側の語が用いられているのは、わずかに「イマダ」(弁

内侍四例・十六夜三例)、「トモニ」(弁内侍三例・十六夜一例)に留まる。

①「大宮大納言殿より」と言ふ声につきて、妻戸を押し開けたれば、いまだ夜は明けぬものから、
(弁内侍日記十四)

②今日は一六日の夜なりけり。いと苦しくてうちふしぬ。いまだ月の光かすかに残りたるあけぼのにもり山をいでてゆく。
(十六夜日記七丁)

③この歌ども、太政大臣殿きかせ給て「と詠みたる沙汰、然るべからず。ともに落度なり」と仰せらるると、
(弁内侍日記八三)

④時雨もたえず嵐にきほふ木葉さへ涙とともにみだれちりつつ、
(十六夜日記三丁)

この両語については、中古から和文体の資料のなかで比較的広く用いられてきた訓読語であり、古くは万葉集にもその用例がみられる。

⑤昔に聞き目にはいまだ(伊麻太)見ず佐用姫が領巾振りきとふ君
松浦山
(万葉集 巻第五 八八三)

⑥春雨に萌えし柳か梅の花ともに(登母爾)後れぬ常の物かも
(万葉集 巻第一七 三九〇三)

これら、両語については、平安期に入っても仮名資料に現れており、

表1・1
△呼応副詞▽

竹むきが記	とはすがたり	中務内侍日記	十六夜日記	弁内侍日記	徒然草	いかで	ネガハクハ	いかでか	ア	ニ	つ	ゆ	カツテ	な	ど	ナンゾ	まして	イハムヤ	ま	だ	イマダ
1	1	0	0	1	3	0	0	2	0	0	0	16	0	2	33	0	2	1	4	6	30
0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	3	0	1	0	2	1	7
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 1・2
△程度副詞▽

竹むきが記	とほすがたり	中務内侍日記	十六夜日記	弁内侍日記	徒然草	
8	31	3	1	0	11	いたく(甚)
0	0	0	0	0	0	スコブル
101	135	14	44	111	69	いと
0	0	0	0	0	4	ハナハダ
6	19	2	7	2	2	いとど
1	3	1	0	0	5	いよいよ
0	0	0	0	0	0	マスマス
21	6	1	0	3	13	いみじく(う)
0	0	0	0	0	5	キハメテ
4	5	3	2	3	18	おほかた
0	0	0	0	0	0	ホボ

表 1・3
△情態副詞▽

竹むきが記	とほすがたり	中務内侍日記	十六夜日記	弁内侍日記	徒然草	
0	22	0	1	0	0	かたみに
0	0	0	0	0	5	タガヒニ
7	10	6	2	8	5	かねて
0	0	0	0	0	0	アラカジメ
3	28	8	1	6	10	しばし
0	0	0	0	0	8	シバラク
5	6	0	0	1	18	すべて
1	0	0	0	0	0	コトゴトク
0	0	0	0	0	0	たはやすく
0	0	0	0	0	6	タヤスク
9	17	2	2	8	5	とく
0	1	0	0	0	6	スミヤカニ

竹むきが記	とほすがたり	中務内侍日記	十六夜日記	弁内侍日記	徒然草	
0	2	0	0	1	3	はやく(う)
3	22	1	0	0	9	ステニ
0	0	0	0	0	0	みたりがはしく(う)
0	0	0	0	0	2	ミダリニ
0	3	2	3	1	1	もろともに
2	5	3	1	3	4	トモニ
0	12	9	0	2	5	やうやう
0	0	0	0	0	1	ヤウヤク
6	31	12	0	11	16	やがて
2	1	0	0	0	6	スナハチ

かなり自由に女流和文において使用されていたようである。「まだ」と「イマダ」について、宮島達夫『古典対照語い表』（笠間書院）をもとに平安期作品の使用度数をみると、表-2のごとく、おおむね「まだ」が多く使われている。しかしながら、ここでとりあげた中世女流仮名文においては、若干ながら「イマダ」の方が使用度数のうえでまさっており、中古の使用状況からの変遷が認められる。

表-2

資料名	和-漢	
	まだ	イマダ
竹取物語	2	3
伊勢物語	12	2
古今和歌集	2	3
土佐日記	2	0
後撰和歌集	11	1
蜻蛉日記	30	1
枕草子	39	1
源氏物語	229	2
紫式部日記	10	1
更級日記	7	2
大鏡	19	12

数値は宮島達夫『古典対照語い表』（笠間書院）1971年による

一方、「もろともに」「トモニ」については、中古においても、いずれも多くの用例がみられる。これは、「トモニ」が、訓読語とはいいながら和歌を含めて広く和文体のなかに取り入れられた語であったところにも理由を求めることができそうである。

⑦夜とともにぬるとは袖をおもふ身ものどかに夢をみるよひぞなき
(和泉式部日記)

「もろともに」「トモニ」については、中世の女流仮名作品では、用例が少なく、どちらが優勢とも判断しがたい。(表-1・3参照) いずれにせよ、ここで扱った和漢対立副詞の使用状況をみる限りでは、『弁内侍日記』『十六夜日記』は、平安仮名文の用語の域をでないものであるといえよう。

ところが、『とはすがたり』『竹むぎが記』については、平安期の仮名文にほとんど用いらなかった訓読語群の副詞も使用しているよう

である。しかしながら、その例をつぶさに検討してゆくと、必ずしもそれらの訓読語が和文脈に溶け込んでいるとは限らないものも多い。

⑧「志賀寺の聖には、『ゆらぐ玉の緒』と情を残し給ひしかば、すなはち一念の妄執を改めたりき」(とはすがたり 卷三 三丁)

⑨三室の名を聞きてすなはち往生すと言ひ、(竹むぎが記下)

⑩歡喜してすなはち菩提心を起こすと説けり。(竹むぎが記下)

⑪は、後深草院から筆者雅忠女に対する話し言葉の例であるが、内容的には説話の引用部分であり、そのまま会話の用語として考えてよいものではなからう。また、⑨、⑩についても、仏典の影響が色濃く現れている例であり、やはり、自然な地の文に訓読語が取り込まれた例とは考えにくい。

⑫春宮立ちも同日なれば、二条殿より卿相雲客ことごとくひきわたさる。
(竹むぎが記下)

⑬は、ここで取り上げた資料群中で唯一みられる「コトゴトク」の例であるが、これも、漢文体の影響が強い表現箇所であり、和文中に自然に用いられた例であるとはいい切れない。

ところが、次のように、ごく自然に和文脈に訓読語が使用されていると考えられそうな例も、わずかながらみられるようである。

⑭「院の御方奉公して、この御方をばなきがしろに振舞ふが、本意なく思し召さるるに、すみやかにそれに呼び出だしておけ」
(とはすがたり 卷三 三四丁)

⑮は東二条院から雅忠女の祖父隆親への文である。実際の文面がそのまま『とはすがたり』の文中に引用されているとすれば、きわめて身分の高い女性による訓読語「スミヤカニ」の使用例となるであろう。

「スミヤカニ」の例は、平安以前の仮名文において、土佐日記に一例みられるが、女流仮名文における例はほとんど見いだすことができない。さらに考察が必要であるが、『とはすがたり』においてもこの一例をみるのみであるので、このことについては特筆に値するものと思われる。

この他にも、平安仮名文ではごく稀にしか用いられなかった呼応の副詞「イハムヤ」が『とはすがたり』(三例)、『竹むぎが記』(二例)において若干ながら使用されている。

⑬「つたなき心のおろかなるは畜生なり。それなほ四恩をば重くし侍る。いはんや、人倫の身として、いかでか御情を忘れ奉るべき」

(とはすがたり 卷四 三五四)

⑭思ひかけぬ御言の葉にかかるだに、つゆの御情もいかでか嬉しからざらん。いはんや、まことしく思し召し寄りける御心の色、人知るべきことならぬさへ、おきどころなくぞおぼえ侍りし。

(とはすがたり 卷四 三七丁)

⑮人の身に命に過ぎたる宝何かはあるべきを、君の御ためには捨つべきよしを思ひき。いはんや、有漏の宝、伝ゆべき子もなきに似たり。

(とはすがたり 卷五一八丁)

⑯現世なほたのみあり、いはんや出離解脱の方便いとたのもしかるべし。

(竹むぎが記下)

「イハムヤ」は、平安女流仮名文において、『蜻蛉日記』『源氏物語』に各一例が使用されている。

⑰うちすぎて山路になりて、京に違ひたるさまをみるにも、このころの心地なればにやあらん、いとあはれなり。いはんや、関に至りて、しばし車とどめて牛かひなどするに、

(蜻蛉日記 中 天禄元年六月)

⑱「〜調べひとつに手を弾き尽くさんことだに、量りもなき物ななり。いはむや、多くの調べ、わづらはしき曲多かるを、〜」

(源氏物語 若菜下)

⑲の例は、後深草院に疑いをかけられた作者が潔白を訴える部分である。いわば、会話文であるが、論理的表現が必要な箇所であり、漢文調の表現が強く現れた文脈中で使用されている。また、⑮・⑯の例は、地の文での使用例であるが、やはり、漢文訓読調の表現のなかで用いられているようである。問題となるのは、『とはすがたり』に用いら

れている⑲の例である。後深草院から暖かい扱いを受けた筆者が喜びを表現している場面であり、とりたてて漢文訓読調の影響がみられない地の文での用例である。「イハムヤ」は漢文訓読体において、本来、訓読語の副助詞「スラ」に先行され、「スラ：イハムヤ」という構文を構成するのが普通であり、それに対応する和文体の表現は和文副助詞「だに」を用いた「だに：まして：」となるのが普通である。峰岸明氏は、前者のような構文を漢文訓読文型、後者の構文を和文型とされ、それらを合せた「だに：イハムヤ：」のような構文を和漢混淆文型と考え、和漢混淆文体の資料に見られる例を挙げて説明された。

⑲生死ノ巨盡ダニ我猶欲盡フ、況ヤ海ノ水ハ多カレド限有リ(観智院本三宝絵詞上)

⑳昨日けふのものゝかくいはんだにあり、いはんや、ことのゝ年ごろの物のかくいへば、(陽明文庫蔵宇治拾遺物語上、第七七話)

先に挙げた『源氏物語』の例⑱も同一の構文になるものであり、この箇所のみ異文はない。したがって、先行する確例がみられるのであるが、『とはすがたり』の例についても、和文脈のなかに和漢混淆文の文型が、現れたものとして考えることができるであろう。

この他にも、中世女流仮名資料において用例のみられる訓読語がある。これまでに述べた訓読語については、若干なりとも平安和文において先行する用例がみられたが、「ステニ」については、ほとんどそのような例がみられず、院政期に入ってから急速に用いられるようになったものようである。とりわけ、『とはすがたり』には、二十二の用例がみられ、むしろこの作品には積極的に取り入れられていった訓読語であるといえる。

㉑その後のこといかがありけん、知らぬほどに、すでに御幸なりにけり。(とはすがたり 卷一 三三丁)

㉒さるほどに、「すでに」と覚ゆるに、起こせ」として、

(とはすがたり 卷一 二十二丁)

②のように、地の文にみられるものが十三例、②のように会話にあらわれたものが五例みられる。このなかには次例③のように、男性のみならず、高貴な女性（大宮院）の言葉として用いられたものが含まれているが、かなり漢文訓読調の強い部分であるので、実際の会話文での用例と考えられるか否か、疑問の残るところである。

③「すでに六旬にあまり、この世に残るところなし。」

（とはすがたり 卷三 二十七丁）

この他、作者の父雅忠が、出家の本意を新院に伝える申し文に四例が集中している。

④すでに身正二位大納言、一藤、氏の長者を兼す。すでに大臣の位をさづけ給ひしを近衛大将を経べきよしを、道（一字脱）右大将書きおく状を申し入れて、この位を辞退申すところに、君すでにかくれましましぬ。…（中略）…すでに五十にみちぬ。

（とはすがたり 卷一 十五丁）

このような使用状況をみると、『とはすがたり』における「ステニ」は、登場人物の性別を問わず地の文、申し文、会話表現と、かなり広い範囲で、比較的自由に用いられているようである。この他の作品では、『中務内侍日記』に一例、『竹むきが記』に三例使用されている。

⑤新宰相殿、「なきそむる虫の声をしきよつれば」とて下の句もなければ、「すでに秋なる心地こそすれ」とつけたるを、

（中務内侍日記）

⑥世の中しづまらぬさまなれど、すでに絶えさせ給へる御ながれあらためられぬる、いとめでたき御ことになん。（竹むきが記下）

⑦靈鷲寺の長老、春の頃よりわづらひ給ひし。日々に弱りつゝ、仏日すでに涅槃の山に入りなんとす。（竹むきが記下）

⑧仏法の光はなほこの山にのみかゝげ給へりときこえつるともし火もかく影かくし給へれば、すでに法滅の期にやと心細くなん。

（竹むきが記）

「ステニ」は、院政期の頃から急速に和文体に現れるようになったよ

うである。その理由としては、対立する和文語「はやう」が、この用法ではそれほど自由には使用されなかったことを挙げることができであろう。

『中務内侍日記』については、⑥「ステニ」一例の他に見いだされる訓読語副詞が、先述した「イマダ」「トモニ」に留まる。したがって、全体的な和漢対立副詞の使用状況からみると、この作品は『とはすがたり』『竹むきが記』よりも『弁内侍日記』『十六夜日記』に近く、保守的な傾向をもつと言えらるであろう。

一方、程度副詞については、ここで扱った中世女流仮名作品のいずれにおいても和文語のみを使用しており、漢文訓読語は、全く用いられていない。これは、「いと」「いとど」「いみじく」「いたく」などの語が、和文調を形成するための基本的な要素として、極めて自然に意識されていたことによるものと考えられる。したがって、これらの作品の筆者には、意識的に訓読語を自己の作品のうちに織り込もうとする意欲は低く、むしろ和文体の範囲に留ろうとする保守的な意図が感じられる。しかしながらそのなかでも、『とはすがたり』『竹むきが記』のように、自然と入り込んでくる訓読語の影響をみると、そこに時代の流れを窺うことができようである。

IV おわりに

同じ表現対象について和漢複数の表現が存在する場合に、いずれの形式を使用するかは、主体の表現意識に関わる問題であるが、副詞の場合、中世の女流仮名文においては、やはり、中古以来の和文語による表現が主に採用されている。とりわけ和文調を形成する程度副詞の場合には、対立する漢文訓読語を敢えて使用することはほとんどなかったようである。このことは、これらの作品の筆者が、訓読語の使用に際して、消極的・保守的な表現意識をもって執筆に臨んでいたことを示しているものと推察される。なかでも『弁内侍日記』『十六夜

『日記』および『中務内侍日記』には、とりわけそのような傾向を窺うことができるが、成立期がこれらより下るものと推察される『とはずがたり』『竹むぎが記』においては、ごく自然な和文脈の内にさりげなく訓読語が用いられていたり、『とはずがたり』にみられるように和漢混淆文体に現れる文型がみられることなど、漢文訓読体の影響を垣間見ることができる。それは中世和文における、保守的な傾向と革新的な潮流の間に生じたひとつの胎動として捉えることができるであろう。

(参考文献)

- 山田孝雄『漢文の訓読によりて伝へられたる語法』宝文館出版・一九三五
岡崎正継『『いまだ』『まだ』について』《文学・語学》二五(一九六二)・九
築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会・一九六三
宮島達夫『古典対照語い表』笠間書院・一九七一
岩井良雄『とはずがたり語法考』笠間書院・一九八三
佐藤武義『今昔物語の語彙と語法』明治書院・一九八四
峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会・一九八六